

# 北海道アイヌの口承文芸にみる イナウの靈魂

阪 口 諒

はじめに

アイヌの世界観において、あらゆるものに靈魂が宿っているとされる。靈魂をもったものは、大きく人間・カムイ・それ以外のグループに分けられる。カムイは人間にない力を持ったものであり、生活必需品のような人間が自由に扱えるもの（仮に「器物」とする）はそれ以外のものに分類される。これら三つのグループが密接に関わり世界が構成されている。そして、カムイと人間を結び付けるものにイナウがある。イナウに関しては、物質文化研究からの研究がいくつかなされているが、口承文芸の側からはあまり研究されていない。口承文芸中の表現は、物質文化研究において、傍証として部分的に利用されることが多いように思うが、実際にはその語りには差異が存在する。

口承文芸で描写されるイナウの姿を、そのままかつてのアイヌの信仰におけるイナウの実態とみなすことはできないが、口承文芸はその背景となる社会と切り離されて存在することはないため、かなりの程度語り手の意識するアイヌの文化が反映されていると考えられる。そのため、アイヌの人々のイナウに対する意識を探る上で、口承文芸は重要な役割を果たすと考えられる。そこで本稿では、イナウの靈魂について口承文芸の中でどのように捉えられているかを検討し、カムイがイナウを人間に伝えたという伝承と、カムイがイナウを欲しがるとの矛盾の解決するための仮説を提示したい。その前にまず、カムイ・イナウについて簡単に説明しておく（以下は中川 2013 による）。

カムイ

カムイとは簡単に言えば人間にない力を持った存在である。動物、植物、また火や水、雷などの自然現象だけでなく、白や船、家なども含まれる。人間はカムイから食料や生活のための資材を提供してもらい、危険がないように見守ってもらう。そしてその返礼として、人間は酒やイナウ（次項参照）、祈りの言葉などを捧げ、カムイに恩恵を与える。



図1. イナウ  
萱野 (1978) p.288 より

## イナウ

イナウは木幣と訳されることから分かるように、典型的なイナウは木を削って御幣状にしたものである（図1）。通常は主にヤナギやミズキの木を用い、その木質部の表面を薄く削って作る。格式や期待される役割の違いによって材料や作り方、形状も異なる。イナウには、儀礼などの際にカムイに捧げられるものや、人間のそばに留まりカムイとして人間を守護するものがある。そして、イナウを受け取ったカムイは神格を増すとされる。

## 2. 口承文芸にあらわれるイナウに関する先行研究

イナウの研究は今まで数多くなされてきているが、それらの多くはイナウの形態差や使用方法などを研究したものである。そして、口承文芸中の表現は、物質文化研究においては、傍証として利用されていることがほとんどである。今石（2009）は口承文芸に現れるイナウの事例をまとめているが、これはアイヌのイナウと本州以南の御幣の比較を目的としたものである。そのほかには、イナウの起源譚を扱ったものに大林（1960）、北原（2014）がある。これらに関しては8節の「イナウの起源譚」で取り上げる。

## 3. 動物神の靈魂

イナウの靈魂について取り上げる前に、動物神をはじめとした存在の靈魂について簡単に触れておく。動物は、もともとカムイの世界にいて、カムイの世界ではラマツ「靈魂」の状態であるが、人間界に来る時に衣装を身につける。これが人間の目に見える肉体ということになる。動物が人間の世界にやって来て人間が動物を捕らえるということは、動物の靈魂を招くことだと考えられており、その動物を解体することは、カムイの着物を解くというように捉えられる。カムイの着物を解くことで靈魂をカムイの世界へ送り返すが、この過程を靈送りと言う。靈送りされてカムイの世界へ戻った動物神は再び人間の世界を訪れるというように、魂はカムイの世界と人間の世界を行き来している。植物神がどのように人間世界に来るのかははっきりと分からないが、動物神と同じように考えていたのではないと思われる。

## 4. 器物の靈魂

人間が作った器物に関しても、靈魂が宿るという風に考えていたようである。これは人間によって作られるイナウでも同じだと思われる。「アイヌ テケ・カラ・ペ アナクネ ネ プ・ネヤッカ ア・ラマッコレ・ワオカイ・ペ・ネ（アイヌの手づくりのものは、何でも魂が与えられているもので）」（語り手：西島てる）という語りも見られる。なお、萱野茂氏による註には「アイヌの手作りのものには、ここでも語られているように何でも魂が与えられている、とアイヌは信じていた。ちょうどアイヌは、神に魂を与えられて生まれる、

と信じているようにである」(萱野 2005 [1974]: 190) とある。

器物もその役目を終えたときには霊送りを行う。霊送りを行うときには傷を付けること、動物で言えば解体に当たるものを行う。そうすることで霊魂と物体を分離する。そして霊送りをすることでもとの世界へ帰還する。萱野 (2003: 217) に「チョイペパカムイアイワクテ=器物を送る・帰す」とあるのがそれである。器物の霊魂に関してはあまり文学に登場しないが、以下ではイナウと同じく樹木から作成される器物の例として船の例を要約して紹介する。

#### 「神謡 69 古船の神の自叙」(平賀エテノア [沙流] 語り)

私は空知川の滝の上の立樹だったが、あるときオキクルミが私を切って立派な船にした。オキクルミの子供の時代まで頑張って働いたが、ついに意識を失ってしまった。大破してしまった私に、オキクルミの子供が酒やイナウ、タバコも供えて引導を渡してくれた。私が空知川をさかのぼって滝の上に至ると、そこに切り株があり、そこからカムイの世界へ帰ることが出来た。(久保寺 1977: 319-26)

この物語をみる限り、船の意識は立樹の時から連続している。つまり、もとの樹木からそのまま霊魂を受け継いでいると言える。そして、船としての役目を終え、霊送りされた後は、元の立樹の切り株に戻ってそこからカムイの世界へと帰っていく。この点は、イナウがカムイの世界へ送られる際、元の樹木へと戻っていく描写が見られないのと対照的である。そして、動物神と器物はどちらも人間が関与して霊魂の帰還を促すという点で共通している。

### 5. 「肉体」を持たないものの霊魂

以上で挙げたもの以外に、言葉などの「肉体」を持たないものに霊魂の存在が語られることがある<sup>(1)</sup>。萱野 (1996) にはイタクラマツという言葉が収録されているが、以下のよう<sup>(1)</sup>に解説されている。このイタクラマツは言葉そのものに宿るものと捉えられている。

イタクラマツ **[itak-ramat]** 言葉の魂。／アイヌ イタク アナクネ ラマツ コロ ワコ エト°レンノ ケマ コロ ベコロ パラ コロ ベコロ イタクラマツ シネンネ アプカシベネ ルウェ ネ ワ=人間の言葉というものは魂を持っていて、それとともに足があるように、口があるように、言葉の魂がひとりで歩くものなのだよ。(萱野 1996: 58)

それに対し、北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課編 (1992) には以下のようにある。

「itak-ramat 言霊 煙草を手にしてしていると、言葉に窮することはない。言葉の上の思慮

を補っている神だと信ずる」(北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課編 1992: 110)

とくにイタクラマツに関しては、それを入れ忘れられたために言葉を話すことが出来なかった少年の物語が記録されている<sup>(2)</sup>。同じように「肉体」を持たないものの霊魂として isoramat「狩猟の魂」などが確認できる。これらは言葉、狩猟をつかさどる能力とも言うことができるものである。言葉などの「もの」に宿る霊魂と、能力を司る霊魂の2つのタイプがあるのは「肉体」を持たない抽象的なものだからだと考えられる。

## 6. 口承文芸中のカムイに捧げられるイナウ

イナウの霊魂について触れる前に口承文芸中のカムイに捧げられるイナウがどのように描写されているのかに関して扱う。その例として、人間に飼われていた仔熊がカムイの世界へ送られる場面を取り上げる。

「神謡8 仔熊の自叙」(平目カレピア [沙流] 語り)

iwai shintoko / ror-oraye na. / inau pirkahi / sake pirkahi / i-e-omante. (中略) inau shike / puyar kari / chi-au-oraye. (六つの行器を / 横座に据ゑたり。 / 美しき木幣 / よき酒 / をもて我を送り呉れたり。(中略—ここで仔熊はカムイの世界にいる両親の元へ行く) 木幣の荷等 / 神窓より / どしどし送り込まれたり。)(久保寺 1977: 85)

というように仔熊は人間に送られカムイの世界へ帰還する。そして、その際に、イナウはお土産として、仔熊とともにカムイの世界へ送られることになる。ただ、この場合、イナウ自体が霊送りの対象になるのではなく、イナウ・酒で以て霊送りがなされる。何故イナウや酒が贈られるのかと言うと、イナウは人間の手を経て作り出されたものであるからこそ貴重であり、それゆえカムイが手に入れたがる(中川 2010: 34) からだとされている。これは例えば、民俗調査でも同じような語りを確認することが出来る。以下は音更の細田カザリ氏の語りである。

どんな神様でも、アイヌの作った御幣を真似しても、なんぼ稽古しても出来ないから、アイヌの inau をやると、どんなに下手に作ってやっても、喜んで大切にしていた。神は inau が好きだったが、どうしても自分では作れないから、それをやればとてもたまげて感心して、欲しがり喜んだという。それはどんなに形が悪くても神の本当に宝物になった。それを kamui kor sisakpe という。ikoro (宝物) のなかでも一番良い宝は sisakpe (一番良いもの) という(渡辺 1990: 254-255)

この語りから、イナウはカムイには作れない、イナウが存在するためには人間が必要だということが読み取れる。また、文学中で仔熊がカムイの世界に帰る場面ではイナウは神様にお土産として捧げられたままで、靈魂と肉体を意図的に分離するというような靈送りはされていない。このことから、靈魂の扱われ方が動物神・器物と異なると言えそうである。また、先ほど取り上げた言葉にも、靈魂があるとされているものの、靈魂を束縛する「肉体」は存在しないため、靈送りはなされないということができらるだろう。

## 7. イナウの靈魂（イナウラマツ）という表現

以下では口承文芸の中でイナウの靈魂に関して触れられている部分を挙げる。例としては多くないが2例見つかった。それについて検討を加える。

### ①「ピセと爺さん」(川上うつぶ [沙流] 語り、萱野茂訳)

(主人公である少年の母のせりふ)

「夫が健康でいたときは多くの神々にイナウをあげて祭りました。ご覧のように病気で村が全滅しようとしています。せめてこの子供一人だけでも、どの神様でもいいから助けて育ててください。そうすれば、イナウの魂もわが夫の血統も残ります。神々も新しくイナウや酒を子孫からもらうことができるはずです」(萱野 1977 : 143)

### ②「神謡 97 子守歌一涕泣歌」(平目カレピア [沙流] 語り)

a-kor shiyon / apunno e-resu / ki wa neyak, / tapampe poka / inau-ramat ne / a-santeke ne / shi-turi na.” (私の赤児を / 恙なく育てて / くれたなら、 / それだけで / 先祖代々の祀りを断たず / 私の血統は / 続いていくわけだ) (久保寺 1977 : 428)

②「神謡 97 子守歌一涕泣歌」にはイナウラマツ「イナウの靈魂」という表現が見られる。この部分をより原文に忠実に訳すと以下ようになる。

→「私の赤児を / 恙なく育てて / くれたなら、 / それだけが / イナウの靈魂となって / 私の子孫となって / 続いていくわけだ」

この部分では赤児を育てることがイナウの靈魂が続くことになるものの、なぜイナウの靈魂と表現されているのかは明らかではない。そこで、②「神謡 97 子守歌一涕泣歌」に付された註を見ていきたい。

久保寺 (1977) による inau-ramat-ne への註

「先祖代々の祀り跡を絶たないこと (アイヌ古老の説)」(久保寺 1977 : 695)

ポン・フチ（1987）による同物語への註

「イナウの魂となるとは、先祖—父親のカムイノミのしかた、まつりのしかたが子孫に伝えられて、どこまでも続いていくことができる、という意味。アイヌの世界観では、死者のあとをいつまでもなげくのではなく、子孫にしっかりとアイヌプリ（註—アイヌの習慣）を伝えることによって先祖がまつられることに重みがある」（ポン・フチ 1987：127）

①「ピセと爺さん」の伝承でも、イナウの靈魂と夫の血統が残ると、神々も新しくイナウや酒を子孫からもらえると語られている。このことから、イナウの靈魂となるという表現は、「先祖代々の祀り跡を絶たないこと」という解釈で妥当だと思われるが、なぜそれを「イナウの靈魂となる」と表現するのかという点は明らかではない（⇒まとめ）。イナウサンテク「（先祖に）イナウ（木幣）を捧げる子孫」（田村 1996：232）ともあるようにアイヌ社会では男系をイナウサンテク「イナウの子孫」ということもこれと関係しているように思われる（女系の言い方を資料で確認することはできなかった）。

先ほど触れたイタクラマツ「言葉の靈魂」であれば、「靈魂」が「言葉」を司るという関係性を持つとも考えられる。それをイナウラマツ「イナウの靈魂」にも当てはめ、「イナウを司る靈魂（＝イナウ作りができる能力）」と捉えることもできると思われる。しかし以下では、イナウの起源譚などでの語りとの整合性や、言葉とは異なりイナウには「肉体」があり、かつ男女の区別が見られることを考慮に入れ、イナウラマツを「イナウに宿る靈魂」と考えて論を進める。

## 8. イナウの起源譚

イナウの起源譚に関して追求したものに大林（1993[1960]）や北原（2014）がある。大林（1993 [1960]：272）は「諸起源神話を通じてみられる基本的な一致点は、イナウが元来は、天からもたらされたか、あるいは、天から下った文化英雄によって始めて作られたという点である。」と述べ、北原（2014：41）は「噴火湾地方の虻田や沙流川流域、静内には神祭りといナウの起源譚があり、イナウを作って儀礼を行うことが人間の義務であることと、その方法を文化神が教えたとされている」と指摘している。これらの指摘は資料を見ても正しい見解であると思われる。本稿では、先行研究で指摘されているものも併せて出来るだけ多くのイナウの起源譚を参照する。以下にイナウの起源に関わる口承文芸を掲げるが、アイヌ語原文があるものはアイヌ語から梗概を作成した。日本語のみの伝承で誤解を招きやすいものは該当部分全てを引用した（下線や波線は筆者による）。

○長万部の伝承（司馬力彌語り）

「司馬さんの物語りによると太古天から日の神が降つてオンコといふ木の女神ラルマニ<sup>(3)</sup>とアカダゴ(註一アカダモカ)といふ木の神の男神チキサル<sup>(4)</sup>(註一チキサニカ)の二神が日の神にお供して天降つたチキサニ女神は非常な美人であつたので日の神は見惚れた。たゞそれだけでチキサニ(註一チキサニカ)は妊娠した生れた子どもが即ちオキクルミの神で日天子の落し子といはれ、この神が北海アイヌの祖神であると傳へられてゐる。この神によつてシュルクといふ樹の根から毒を取って熊の射方を教へられ又、魚の形からチツプ(小舟)の造り方と漁業漁法をも授けられた。イナオもそのエカシトツパも皆この神が教へたのである。だから熊とりの時にもイナウを神に祭り手向するのである。この系統のアイヌは自分達はオキクルミカムイの子孫だとは信じてゐない。日高アイヌはそれを堅く信じ切つてゐる。オキクルミカムイは天地創造の神であつて大和民族の日の大神と同じやうな神話を傳へてゐる」(田村 1931 : 28-29)

### ○虻田の伝承

「イナヲの起源譚」(末部加屋吉語り、吉田巖筆録)<sup>(5)</sup>

「太古このモシリが出来た時、天より神がキラウシ・カムイ(額に角ある鬼のような神)を使に、下界にイナヲというものをあまた持たして下し、このイナヲを人間が皆作り且これによらずの悪を除き善徳を得させるよう教えひろめようとした。そこでキラウシ・カムイはおのれひとり最多く慾深く、イナヲをもって下界したの功績を自分一手に収めようと慾ばつた。おろされるままに今の有珠の焼山に下りようとした。天神はその慾心をにくみ彼キラウシ・カムイをひきとらえイナヲを奪つて彼を火口から地獄にまでふみにじりおとして絶命させた。そのとりかえしたイナヲこそ今日のイナヲの起源である。イナヲに男女の区別がある。これをつくる木材にもいろいろある。(明治 43.8.23 末部加屋吉談)」(吉田 1957 : 10-11)

### ○沙流の伝承

①「聖伝 4 アエオイナの神の自叙」(平賀エテノア語り)

人間たちに分け与え、仕事として教え諭すために、天界からアエオイナの神(Acoina-kamui)の元に、キケチノイエイナウ(Kike-chinoye-inau「男の幣神」)・キケパラセイナウ(Kike-parse-inau「女の幣神」)が下ろされたが、魔神によって奪われたので、アエオイナの神が取り戻しに行く。(久保寺 1977 : 510-517)

②「樹々の神とイナウ(Oina)」(タウクノ・コボアヌ・鍋沢ユキのうちの一人語り)

天界からイナウの男神とイナウの女神の御夫婦の神様が降臨した。しかし、魔神に奪われたので主人公はイナウを取り返しに行く。イナウは人間が削ってカムイへ祈るため

のものである。(ネフスキー 1991: 167-178)

③「柳がイナウネニ（イナウを作る木）になったわけ（仮）」（萱野茂筆、アイヌ語なし）

昔、コタンカラカムイ（国造りの神）が、国土を造り終えて神の国へ帰られるとき、食事をする時に使っていた箸を大地に突きさして帰った。その箸に根が生えて柳となり、この柳の木を削って美しいイナウを作り、神様にあげるようになった。（萱野 1978: 284）

#### ○静内の伝承

①「起源や由来を説く昔話」（葛野辰次郎筆録）<sup>(6)</sup>

削り掛けを扱った男性の木幣（キケ チノエ ピンネ イナウ）と、削り掛けをばらつかせた女性の木幣（キケ パルセ マウツネ イナウ）の夫婦の木幣をアイヌラックルに授けて下界に降下させた（北海道教育庁生涯学習部文化課編 2001: 89-92）。

②「イナウユーカラ」（森崎藤吉語り、増田聞き書き）

「昔々神がこの国を造った時、国がきれいに出来たので天国へ帰るといふ時に、途中で鋏（トンガとも言う）を置き忘れたことに気がついて振り返ってみると、そこには柳の木が生えていた。国はひらけたが何もないアイヌの人たちに、神は柳をさずけてこれで御幣を作るようにと教えたのでした。ところが多くの悪魔どもは、この御幣をアイヌの人たちが持つと悪魔どもは生活できなくなるので、この御幣をとり上げて岩屋に隠してしまった。これを知った神が、これは大変とばかりに悪魔と戦うのである。—森崎藤吉さんの説明」（増田 2010: 125）

③「ふうふのイナウがさらわれた」（葛野辰次郎語り）<sup>(7)</sup>

天界から人間界に夫婦のイナウが下されたが、悪神がそれを奪ってしまった。人間を気の毒に思ったアイヌラックルはそれを取り戻すために闘う。（「オルシペスウォフ° 5」）

資料に挙げたイナウの起源譚から、次のような傾向が読み取れる。まず、天界からイナウが降ろされる（長万部、虻田、沙流①、②、静内①③）、もしくは、天界から降ろされた柳から作る（沙流③、静内②）という語りである。つまり、天界ですでにイナウが作られている、もしくは、天界から降ろされた柳から作られていると言うことができる。この二つのタイプの語りは異なるもののように見えるが、人間の世界が作られたときに天界のイナウもできたという点では共通していると言えよう。そして「人間の仕事」という語りになされているが、創世後は「人間が皆作り」（虻田）、「ainu usapki ne（人間の仕事として）」（沙流①）、「ainu kē-wa / kamuj-a-enomi-kuni-p / inau ne-shiri / ne-hi tapan-na（人間が

削って / それでカムイを祈るべきものが / イナウなので / あります。）」(沙流②) というように人間によるイナウ作りが必須 (人間世界ができてからは人間の仕事となり、カムイは作らなくなった) であることを表していると考えられる。

## 9. イナウが男女一対 (夫婦) である理由

起源譚に登場するイナウは男女一対 (夫婦) であることが多い (虻田、沙流①、②、静内①③) ことが特徴として挙げられる。これは動物神と同じ傾向だと言える。そして、この点はイタクラマツなどの「肉体」を持たないものの靈魂とは異なっている。この動物神をはじめとしたカムイは人間世界にやってくる訳であるが、その理由として中川 (2010 : 26) では、①人間世界を見に (観光しに) 来る ②人間世界で子孫を増やすために来る ③人間世界で何らかの役割を果たす使命を帯びて来る。④人間と取引をしに来る の4つが挙げられている。これをイナウに当てはめた場合、イナウは自らの意思で人間世界に来るわけではないので①④を除外した。そして、③の役割に関しても今回の対象から外している。というのも天から役目なしに下ろされたものは一つもないという語りがみられ、あらゆるものに当てはまるからである。そこで、②の可能性を探ってみたい。

人間世界にくる理由として②が挙げられているのは、カムイは肉体を持たないと子どもを産めないというからである。カムイの世界ではラマツ「靈魂」の姿であり、子供を産むためには肉体が存在できる人間世界に来る必要がある。こうした人間の世界に来て子孫を増やすということを表した語にウワリモシリ「出産する世界」という呼び名がある。これは人間世界の別名であるが、これをイナウに当てはめた場合、人間がイナウを作ることが即ちイナウが増えることにつながる。起源イナウが男女一対と語られているのは、イナウが増えるのに必要な条件として考えられていると言えるだろう。なお器物ははっきりとは語られていないように思うが、萱野 (1993[1979] : 29-36) のように薄手のなべ (カパラベポンス) の若者が出てくる事例があるので全てではないにしろ男女の別が想定されている可能性がある。言葉には男女の区別が語られないが、それは「肉体」がないことが関わっていると思われる。

## まとめ

イナウは靈魂を分離するための解体はされないが、これは動物神・器物と異なっている (3, 4 節)。また、イナウは人間にしか (人間世界でしか (9 節)) 作れず (6 節)、作り続けなければならない (7, 8, 9 節)。そして、起源イナウ以外は人間が作る (6, 8 節)。イナウの靈魂は樹木に由来せず (4 節) (イナウ独自の靈魂が宿る可能性)、天から降下した夫婦のイナウが起源の可能性がある (8, 9 節) といった点を含めてイナウの靈魂を考察すると、人間世界が作られた後は、人間が作ることでイナウに靈魂が宿り、それが続けられること (= 儀礼が行われること) で、イナウの靈魂が人間の世界とカムイの世界を行き来することができ

る。つまり、イナウの靈魂がカムイの元へ送られるには人間世界でイナウが作られることが必須だということである。そして、7節で取り上げた「イナウの靈魂となる」という表現は、男児（イナウの作り手）を育てることが人間の仕事であるイナウ作りを行うことにつながり、そうすることで人間世界で増やしたイナウを神々に捧げることができるということを表しているのではないだろうか。そう考えることで、カムイがイナウを人間に伝えたという伝承と、カムイがイナウを欲しがるとの矛盾が解決するように思われる。

## 附記

本稿は2018年6月2日に関西福祉科学大学で行われた第42回日本口承文芸学会大会の研究発表「イナウの靈魂の循環—北海道アイヌの口承文芸から—」を改題し、増補・改稿したものである。奥田統己先生、北原次郎太先生、狩俣恵一先生をはじめ多くの方から有益なご教示をいただいた。深くお礼を申し上げる。

## 註

- (1) 少し本題から外れるが田村（1995）の記述に関して指摘をしておきたい。田村（1995：555）には「pirka isoytak, pirka ramat kor uwepeker よい話、よい魂を持つ民話。《W独話》」とある。民話にも魂があると考えられなくはないが、この用例の原資料である早稲田大学語学教育研究所編（1985：48-49）の例を見るかぎり、pirka ramat を持っているのは女の人だと思われる。
- (2) 「チチケウニツネイと疱瘡神の息子」。この物語は「アイヌ語口承文芸コーパス 音声・グロス付き」で閲覧・視聴が可能である。
- (3) オンコ（イチイ）の木がララマニ rarmani である。
- (4) アカダモ（ハルニレ）の木をチキサニ cikisani という。
- (5) この伝承を筆録した吉田巖が、虻田の伝承として河野広道に語ったものが青柳編（1982：142）に記録されている。
- (6) 葛野辰次郎氏は他にも同内容の伝承を複数筆録している（葛野 1978：30；葛野 1991：15）
- (7) 葛野辰次郎氏が語った物語を北海道教育委員会が録音した資料を基にアニメ化されたもので、原資料は、北海道教育委員会収録「アイヌ民俗文化財伝承記録 CD70」（北海道立図書館収蔵、請求番号 CD667）である）

## 参考文献

青柳信克編『河野広道ノート 民族誌篇1』1982、北海道出版企画センター  
今石みぎわ「アイヌの口承文芸に語られるイナウ—本州以南の削りかけとの比較から」『東北芸術工科大学東北文化研究センター研究紀要』第8号、2009、東北芸術工科大学東北文化研究センター

- 大林太良「イナウの起源」『北方の民族と文化』1991(1960)、山川出版社
- 萱野茂『アイヌの民具 運動協力者版』1978、『アイヌの民具』刊行運動委員会
- 萱野茂『アイヌの昔話 ひとつぶのサッチポロ』1993 (1979)、平凡社ライブラリー
- 萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』1996、三省堂
- 萱野茂『新訂復刻 ウェベケレ集大成』2005 (1974)、日本伝統文化振興財団
- 北原次郎太『アイヌの祭具 イナウの研究』2014、北海道大学出版会
- 葛野辰次郎『キムスポ』1978、私家版
- 葛野辰次郎『キムスポV』1991、私家版
- 久保寺逸彦「沙流アイヌのイナウ」『アイヌ民族の宗教と儀礼』2001 (1971)、草風館
- 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』1977、岩波書店
- 田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』1996、草風館
- 田村浩「北海アイヌ探訪記」『旅と伝説』7月号、1931、三元社
- 中川裕『語り合うことばのカーカムイたちと生きる世界』2010、岩波書店
- ネフスキー・ニコライ著、グロムコフスカヤ・エリ編『アイヌ・フォークロア』魚井一由訳、1991、北海道出版企画センター
- バチラー・ジョン『アイヌ・英・和辞典』第4版、1981、岩波書店
- 北海道教育庁生涯学習部生涯学習部文化課編『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書 (久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿)』1992、北海道教育委員会
- 北海道教育庁生涯学習部文化課編『平成10年度 アイヌ民俗文化財調査報告書 (アイヌ民俗調査XⅧ)』1999、北海道教育委員会
- ポン・フチ『ユーカラは甦える 改訂版』1987、洋泉社
- 増田又喜『アイヌのふるさとに歌を求めて』2010、文芸社
- 吉田巖『東北海道アイヌ古事風土記資料 愛郷譚叢 古老談話記録』第3篇、1957、帯広市教育委員会
- 早稲田大学語学教育研究所編『アイヌ語音声資料』2、1985、早稲田大学語学教育研究所
- 渡辺仁「北方狩猟採集民の聖山信仰：アイヌを中心とする機能的概観」小谷凱宣『北方諸文化に関する比較研究』1990、名古屋大学教養学部

## URL

「オルシベスウォフ5」の「ふうふのイナウがさらわれた」(2018/09/10 参照)

<https://www.fipac.or.jp/web/learn/language/animation/details/h28.html>

「アイヌ語口承文芸コーパス 音声・グロス付き」(2018/09/10 参照)

<http://ainucorpus.ninjal.ac.jp/corpus/jp/>

(さかぐち・りょう／千葉大学大学院人文公共学府博士前期課程)